

研究課題	集団をよりよくする意思を高め、行動する協働的学習者の育成
副題	～生徒がよりよい ICT 活用の在り方を考え、実践する取組を通して～
キーワード	コンピテンシー・深い学び・ICT 活用・デジタルシティズンシップ
学校/団体 名	新潟大学附属新潟中学校
所在地	〒951-8535 新潟県新潟市中央区西大畑町 5214 番地
ホームページ	http://jhs.niigata.ed.niigata-u.ac.jp/

1. 研究の背景

社会や経済の混乱、低迷、生産人口の減少の一方で増加する外国人労働者、情報化やグローバル化の進展や技術革新等により、社会構造や雇用環境が大きく変化を遂げる時代。このような社会に参画する生徒は、決まった答えのない未曾有の事象、目標や理念を失う現象、傍観者的傾向など、これからの社会で生じる新たな問題を解決していくことが求められる。

その中において新学習指導要領で示されている教科等で育成する3つの資質・能力「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」を発揮して、教科の授業や特別活動等で学んだことを、社会で起きている事象・現象等の理由や背景につなげることや、OECD Learning Framework2030 においてキー・コンピテンシーの育成が求められている。つまり、学校教育を通して、様々な変化に向き合いジレンマを乗り越えること、他者と協働して課題を解決することや、新たな価値の創造に責任をもってやり遂げる資質・能力の育成が急務となっている。

だからこそ、生徒は、与えられた課題を追究し、決められた知識を学ぶだけではなく、自ら課題を見出し、既存の知識と新しい知識とを関連付け、自分にあった方法で課題を乗り越え、自分がかかわる世界(人、もの、こと)をよりよい方向へ変える力を身に付けることが必要である。

2. 研究の目的

当校の教育目標は、「生き方を求めて学ぶ生徒」である。この「生き方を求めて学ぶ生徒」の具体的な姿は、「自らの目標を設定し、目標達成に向けて、学んだことを既存の知識や新しい知識を関連付けて、自分の生き方を求め続けることができる生徒」である。社会とのかかわりの中で、自分が向き合うべき課題を見つけ、課題の解決に向けて、主体的に取り組んだり、他者と協働したりしながら、学び続けることができる生徒の育成を目指している。

先が見えず、正解のないこれからの時代を生きる生徒にとって、そこで生じる新たな問題について、背景や立場が異なる他者を尊重し、協働しながら最適解を見いだしていくことが求められている。だからこそ、生徒には、背景や立場が異なる他者と協働する際、異なる考えが表出される中で、目的と方法の整合を図り、妥協点を見いだしながら対立やジレンマを乗り越え、自分がかかわる世界をよりよい方向に変える力が必要となる。

このように自分がかかわる世界をよりよい方向に変えていこうとする際、ICT 活用の議論は不可欠である。なぜなら、様々な背景や立場が異なる他者と出会い、協働することが加速しているのは ICT の進展の賜物に他ならないからである。また、デジタルネイティブとも言われる生

徒たちが生きるこれからの世界は今よりも一層 ICT 活用と切ってみ切り離せない世界になると考えられるからでもある。

昨年度当校では、生徒・教員へのタブレット端末の貸与、ネットワーク環境など環境整備が進められ、ICT 活用を念頭に置いた教育活動を実現できる場面が増えてきた。今年度はより一層、ICT 活用を進めつつ、ICT 活用の光と闇の部分进行査し、よりよい ICT 活用の在り方を全校生徒で考えていく必要がある。

以上のことから、本研究では、生徒が ICT を活用しながら、自分がかかわる世界をよりよい方向性に変える力となるコンピテンシーを育むための教育活動の在り方を明らかにする。特に、次の2点からコンピテンシーを育むための教育活動の在り方を探る。1点目は、ICT を活用した教科・領域学習の在り方である。これは、ICT の長所と各教科・領域の本質を照らし合わせることで、ICT 活用のための教科学習ではなく、教科学習のための ICT 活用の在り方を探ることを意味する。2点目は、ICT 活用の長所と短所を生徒と教員で吟味する活動の在り方である。これは、デジタルシティズンシップという考え方を基に、よりよい ICT 活用の在り方を吟味することを通して、生徒が自身の在り方を顧みる活動の在り方を探ることを意味する。

- ① コンピテンシーを育むための ICT を活用した教科・領域の授業の在り方
- ② デジタルシティズンシップを基によりよい ICT 活用について吟味する活動の在り方

3. 研究の経過

本校の研究部を本研究の研究組織の中心に位置付け、全職員で研究に取り組んだ。その一部を抜粋して掲載する(表1)。

表1 研究の過程

時期	取組の内容	評価のための記録
4月4日(月)	・ 職員研修(研究概要の説明、各教科等授業案の提案)	提案資料
4月5日(火)	・ 職員研修(各教科等授業案の提案、特別活動研修、カリキュラム・マネジメント研修)	提案資料
5月9日(月)	・ 職員研修(ICT 実践研修①)	提案資料
5月31日(火)	・ オンライン春の授業づくり研修会	パワーポイント資料
6月～7月	・ 研究授業I(公開授業・協議会)	観察記録・写真・資料
8月2日(水)	・ オンライン夏の実践発表会	提案資料・参加者アンケート
8月3日(木)	・ 職員研修(ICT 実践研修②)	提案資料
8月17日(水)	・ オンライン夏の授業づくり研修	観察記録・写真・資料
10月28日(金)	・ 教育研究発表会(対面開催)	提案資料・参加者アンケート
12月23日(金)	・ 職員研修(授業実践の振り返り)	資料
12月26日(月)	・ 職員研修(今年度の振り返りと次年度の研究の方向性について)	生徒アンケート 教師の所感(付箋)

4. 代表的な実践

(1) ICT の活用による地域や社会とつながる主体的・対話的で深い学びの実現

○代表的な実践として、総合的な学習の時間における実践を紹介する。

①単元名

「私×社会＝？」 ～興味・関心のあることを社会と結び付けて探究しよう～

②目標

興味・関心のあることを社会と結び付けて探究することを通して、社会参画するよさを見出し、今後も自分の周りをよりよくしていこうという思いを抱きながら、自己のよりよい生き方を考えていくことができる。

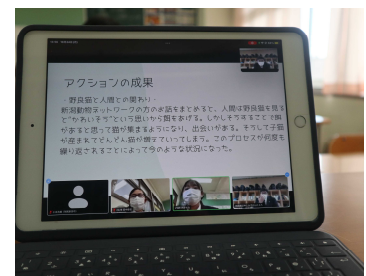
③実践の概要

本単元では、自分の探究と社会とを結び付けることを通して、社会的に意義ある探究にしていくことを目指している。例えば、情報収集の段階で、学内では得られない情報を求めフィールドワークに出かけたり、有識者にその分野のイロハを教えてもらったりすることが考えられる。自分だけでは得られない「生の情報」を得ることができ、整合性の高い探究やオリジナリティある探究へとつながっていく。また、探究成果を「誰に」、「どのように」伝えるかを考えさせることを通して、個人の範囲で閉じた探究にならないように配慮する。探究成果を誰かに伝えるからこそ、それが誰かの役に立ったり、大人に認められたりする経験が生まれ、生徒は社会参画するよさを少しずつ見出していくことができる。

このように、自分の探究を社会と結び付け、さまざまなヒト・モノ・コトと出会いながら、成功体験を積んでいった生徒は、自分でも社会により影響を与えられるのだという達成感や自己効用感を感じていく。そして単元末には、「自分たちでも社会に変化をもたらせるかもしれない」、「今後も社会に目を向け、自分のできる範囲で働きかけながら過ごしていきたい」という思いを抱きながら、自分の探究と自分の人生とを関わらせて、今後の自己の生き方を考えていく。

④ 単元の実際

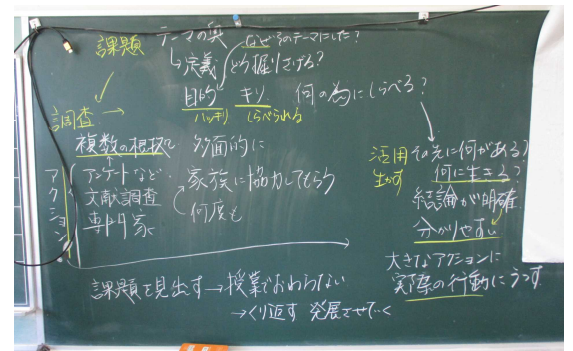
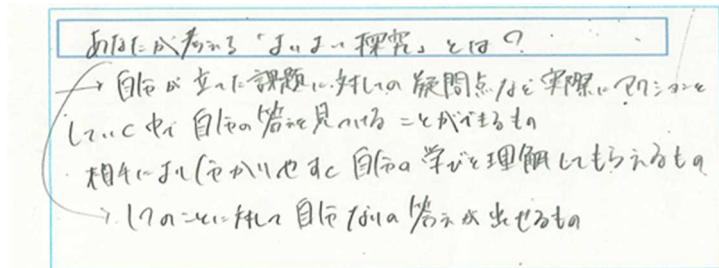
○横浜国立大学附属横浜中学校とのオンライン探究交流会



【 他校生徒との交流会の様子 】

自分たちと同じように、個人探究に取り組んでいる他校の生徒と「探究の成果」を

交流したことで、テーマ設定の面白さや調査方法の工夫など、参考となる部分が見えてきた。



【 生徒の授業後の振り返り 】

【 授業時の板書 】

生徒は交流会後、他校の生徒の探究はどこが優れていたかを考えることを通して、「課題」「調査」「活用」という観点を基に、よりよい探究の条件を見出していった。よりよい探究の条件を見出した生徒は、自分の探究がよりよい探究の条件を満たしていたかを振り返りながら、その結果を基に、次なる探究計画を立てていった。条件を満たしていくような計画を考える過程で、探究の質が高まっていった。

(2) よりよい ICT 活用の方法を考えるデジタルシティズンシップ教育（DC 教育）



【 DC 教育担当から全校生徒に向けての授業 】

今年度から当校ではデジタルシティズンシップ（Digital Citizenship）教育に取り組んだ。インターネット世界の危険性に対して、規制や管理で身を守ることを最優先にするのではなく、生徒の豊かな発想やタブレット端末のもつ可能性を十分に発揮してもらうことを大切にしたいという、職員の思いを生徒と共有した。



【 学級ホームページを作成する授業 】

「学校、学級の様子が全然わからない」といった保護者の声にこたえるべく、また、「もっと自分たちの活動の様子を伝えたい」という生徒の声にもこたえるべくデジタル端末を活用して、「学級ホームページを作成する」という授業を行った。ICT を創造的に活用する中で、生徒は情報発信者としての自覚と行動規範(配慮や個人情報、著作権など)を学んでいくことができた。

5. 研究の成果

教育活動アンケートの結果から得られた次の2つを今年度の研究の成果とする。

質問項目	肯定的評価の割合
生徒が情報を収集、整理・分析、まとめ・表現する際に、テレビ会議システムの活用が有効であった。	8割
テレビ会議システムを用いた交流活動で得た知識・考えが、世界の見方やかかわり方を変容させ、自分のかかわる世界をよりよい方向へ変える実感を得た。	8割
附中 GIGA 宣言を基に、よりよい ICT 活用の方法を考えることができた。	8割

今年度、総合的な学習の時間の授業や英語の授業、生徒会専門部の活動において、生徒たちは Zoom や Google Meet を活用して海外・県外の生徒と主体的に交流することができた。そのように様々な人との出会いを通して、新たな世界の見方やかかわり方に知り、自身のかかわる世界をよりよくしていこうという意思・意欲を醸成することができたと考えられる。

また昨年度創った附中 GIGA 宣言を意識して ICT を活用する中で、生徒たちは自分の目指す学校生活や学びの在り方を見つめ直すことができたと考える。

6. 今後の課題・展望

昨年度当校では、生徒・教員へのタブレット端末の貸与、インターネット通信環境の整備がなされた。また Google Workspace を活用し、生徒・教員のクラウド上での作業が可能になった。ハード面での環境整備が、これまでには想像できなかった豊かな学びを可能にしていることは

間違いない。

一方で、ICT 活用に関する教師と生徒間での働きかけや支え合える風土の醸成には改善の余地がある。今年度はデジタルシティズンシップの視点から、よりよい ICT 活用の在り方を全校生徒で考えてきた。今後は、これまでの ICT 活用で見えてきた、正の側面と負の側面を十分整理した上で、よりよい ICT 活用の在り方を考えていく必要がある。そのために、生徒の思いだけでなく、教師の思い、そして保護者や地域の人の思いも生徒と一緒に交流していくことが有効であろう。そのような活動を通して、生徒が策定した「附中 GIGA 宣言」を絵に描いた餅にすることなく、絶えず生徒が自らのよりよい在り方を求め続けられるようにしていきたい。そのような新たな視座から、さらに ICT 活用のよりよい在り方を生徒と一緒に考えていくことが今後の課題となる。

7. おわりに

最後に、今年度の当校の研究を進めるにあたり、福井大学教授・木村優先生、東京大学准教授・一柳智紀先生には、貴重なご助言と多くの励ましのお言葉をいただきました。ICT 活用のための環境整備に3年間助成いただいたパナソニック教育財団の皆様に厚く御礼申し上げます。

8. 参考文献

- ・ 文部科学省(2019)『学習指導要領』
- ・ 奈須正裕 他(2015)『教科の本質から迫るコンピテンシー・ベ이스の授業づくり』図書文化
- ・ 奈須正裕 他(2015)『知識基盤社会を生き抜く子どもを育てる コンピテンシー・ベ이스の授業づくり』ぎょうせい
- ・ 当校研究紀要 第60集(2018)「豊かな対話を求め、確かな学びに向かう生徒を育む授業(2年次)」
- ・ 当校研究紀要 第61集(2019)「豊かな対話を求め、確かな学びに向かう生徒を育む授業(3年次)」
- ・ 田村 学(2018)『深い学び』東洋館出版社
- ・ 新潟大学教育学部附属新潟中学校 (2017)『附属新潟中式「3つの重点」を生かした確かな学びを促す授業—教科独自の眼鏡を育むことが「主体的・対話的で深い学び」の鍵となる!』東信堂
- ・ 新潟大学教育学部附属新潟中学校研究会(2018)『附属新潟中式「主体的・対話的で深い学び」をデザインする「学びの再構成」』東信堂